

## 農業にとって「自然」とは何か

うね 豊  
字 根

不思議だ。6月になり、田に入水し、代かきをしたとたんに、蛙が鳴き出し、アメンボやゲンゴロウや水カマキリが飛んで来て泳ぎだし、メダカやドジョウやフナが産卵のために入って来たり、ミジンコやカブトエビや豊年エビが生まれたりすることが。田植という人為的な「自然改造」が、突然行われたにもかかわらず、生きものはちゃんとそれに対応しているように見えるのは、どうしてだろうか。

九州の夏空に群れ飛ぶのは、薄羽黄トンボという名の赤トンボだ。私たちは「盆トンボ」や「精霊トンボ」などと呼んで親しんできた。東南アジアから飛来するこのトンボは、田植直後の田んぼに産卵し、一カ月後には大発生する。(多い田は一反で5,000匹も生まれる) 減農薬運動で真っ先に復活したのが赤トンボだったのは、このトンボが毎年海外から飛来していることによる。

消費者はもちろん、百姓も赤トンボやメダカやホタルは水田がなければ生きられないことに無頓着だった。なぜなら、これらの生き物は、「自然」だったからだ。こうした日本人の自然観では、戦後の近代化による「自然破壊」に対抗する論理が、生まれるはずはなかった。農業の側から、環境破壊に対抗する論理が生まれるのは、有機農業運動・減農薬運動を待たねばならなかった。しかし、これらの運動も食べものの「安全性」でとどまっでいて、環境まで届かない人たちが多い。

さて、問題の所在は「近代化」に行き着く。田んぼから流れ出る水が、近代化でどう変わったかを考えてみよう。近代化以前の田んぼから流れ出る水に含まれる養分は、川や海の生きものを育てるのに役立った。近代化以後は、川や海を汚すばかりだ。河川改修で川

の浄化機能が落ちたことに加えて、田んぼの肥料が化学肥料に変わり、量が増えたことで汚染は急速に進んだ。もちろん工場や家庭の排水の負荷はさらに大きかった。つまり、時代はとっくに農業技術・政策の転換を要求していたにもかかわらず、近代化農業技術は未だにそれに応えられないでいる。

「自然」は人間とは別の世界に存在するという近代化思想が、「自然破壊」に手を貸してきて、国民にその自覚も育たないようにしたせいだろう。実は「自然」は人間のくらしの結果であり、くらしに密接に対応している。農業が営まれるから、そこに百姓が住み、田畑を耕すから、トンボ、蛭、カブト虫やコウノトリが増えた。それらを農業が生み出している「農業生物」だと、今でもほとんどの国民は自覚していない。また百姓も自分の言葉で、消費者にこのことを伝えることもなかった。伝えなければ「自然」は危機に陥るという自覚も育たなかった。それはどうしてだろう。

百姓はトンボや蛭やドジョウやタニシを増やすために、水路を開削し、田を開いたわけではなかった。稲を植えるためにである。米をとるためにである。しかし、その結果として、生産の過程で多様な「農業生物」が生まれ育っていった。そしてその恵みを地域の人たちが受け取った。田は決して米だけを生産する場ではなかった。しかし、だからと言って、米以外の「産物」を、田の生産物だなんて主張することはなかった。「自然」とはそういうモノであった。この国の近代化はそうした伝統的な価値観にあぐらをかき、利用する形で成し遂げられたのだ。

つまり、百姓にとっても、赤トンボなどの農業が生み出す自然環境は、ことさら対象化されていないのだ。科学でも捉えられていない、と言っている。近代的な戦後の稲作技術が普及浸透したにもかかわらず、未だに「自然環境」は農業技術の外にある、とも言える。

戦後の農業近代化政策は、田んぼやその周辺でとれていたドジョウやタニシやフナなどの、米以外の生産物を政策の対象から外した。田んぼはいかに米の生産と生産性を上げ、いかにカネを稼ぐかが、大切だという価値観（近代化精神）を押しつけた。その結果、多くの消費者は、農業が生み出す農産物以外のモノ（いわゆる自然）はタダだと錯覚するようになってしまった。そのことにいらだっ

た百姓は「宇根さん、トンボやメダカではメシは食えない。」と自嘲気味に言うようになった。いま、私たちは「そうではない。トンボやメダカを大事にする農業を誉め讃える文化と政治を産みだそうよ。」と言おう。

それが、私たち「農業指導員」のこれから最も重要な仕事になっているのだから。

（福岡県二丈町・

福岡県福岡地域農業改良普及センター）